法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-30

# 17～19世紀におけるロシア帝国のシベリア・極東の地域像

KOMEIE, Shinobu / 米家, 志乃布

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2012-05

様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４年　５月　２４日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０６９５
研究課題名（和文）１７～１９世紀におけるロシア帝国のシベリア・極東の地域像
研究課題名（英文）The Image of Siberia and Russian Far East by Russian Empire from seventeenth century to nineteenth century

研究代表者
米家　志乃布（KOMEIE SHINOBU）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：３０２７２７３５

研究成果の概要（和文）：本研究では１７～１９世紀のロシア帝国のシベリア地域像を明らかにすることを目的とした。具体的には、１７~１８世紀にかけて作成されたレーメゾフの３冊のシベリア地図帳を分析し、そこに描かれているシベリア像について考察した。また１８世紀前半におけるベーリングのカムチャツカ探検によるシベリア図をもとに、シベリア・極東の地域像の変容についても明らかにした。さらに２０世紀前半におけるシベリア・極東の出版都市図の所在調査および分析も行った。

研究成果の概要（英文）：The Russian Empire compiled many maps in Siberia and the Far East in order to comprehend geographical information from seventeenth century to nineteenth century. In this research project the author examines the characteristics of the image of Siberia and Far East that emerges from three manuscripts books by Remezov, he is a famous Russian cartographer, in the early eighteenth century, some Russian manuscripts about Bering's expeditions between 1725-1730, and the trend in the mapmaking creation of Russian colonial city in Siberia and Far East in the first half of the twentieth century.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００８年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| ２００９年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| ２０１０年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| ２０１１年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| | | | |
| 総　計 | 2,100,000 | 630,000 | 2,730,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学
キーワード：絵図・地図

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、２００３年度にロシア科学アカデミー東洋学研究所客員研究員として１年間モスクワに滞在し、史料・文献調査を行った。その際に、ロシア地図史研究およびシベリア図研究に関する知見を得たため、日本に帰ってからも継続して研究を行うことにした。

２００４年度からは主に日本語・ロシア語・英語の先行研究や公刊された史料を読み込み、そのなかにおけるシベリア図研究の状況やシベリア図研究の課題をおさえた。それ

をもとに、２００７年度から科研費申請を行い、２００８年度に採択された。

２．研究の目的

本研究では、１７～１９世紀にロシア帝国が作製した主要なシベリア図およびシベリア地図帳などを取り上げ、その作製目的や意義、ロシア地図史上の位置づけを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

研究の方法としては、まずはロシアで公刊されているシベリア図関係の歴史アトラス類を購入し、それをもとに基本的なシベリア図の作製状況をおさえた。次に、それらのシベリア図やシベリア地図帳に複製本が出版されていれば、その現物を入手し、その複製本をもとにしながら、シベリア図に関する先行研究を読み込んだ。さらに、日本で手に入らない地図類については、モスクワにあるロシア国立歴史博物館・ロシア国立図書館地図部・ロシア軍事史文書館、サンクトペテルブルクのロシア国立図書館地図部、イルクーツク大学附属学術図書館、ハバロフスク・ウラジオストク・ブラゴベシチェンスクといった極東地方の図書館などで所在調査を行い、可能ならば写真撮影を行った。

４．研究成果

（1）レーメゾフによるシベリアを描いた三冊の地図帳に関する研究

レーメゾフの作製した地図帳は三冊存在する。①ハーバード大学が所蔵する『地勢図帳』であり、1958 年にファクシミリ版でのモノクロの複製本が公刊された。②モスクワのロシア国立図書館が所蔵する『シベリア地図帳』であり、2003 年に写真複製され、カラーの複製本とテキストの現代語訳と研究論文が公刊された。③サンクトペテルブルクのロシア国立図書館が所蔵する『公務の地図帳』であり、2006 年に写真複製され、カラーの複製本とテキストの現代語訳が付されて公刊された。この三冊の地図帳の複製本をすべて当科研にて購入し、分析を行った。

まずは、三冊の地図帳の作製目的や掲載地図の違いを踏まえ、それをもとにレーメゾフの描いたシベリア地域像を明らかにした。従来の研究では、レーメゾフの地図帳所収の地図については、それぞれの地図帳の作製意図やそこに集成されている地図の特徴の差異について明確に意識されていなかった。しかし、本研究では、それぞれの地図帳の資料としての性格を踏まえたうえで、各地図帳の描く範囲と地図の図像の特徴から、シベリア地域像を考察した。

レーメゾフ作製の三冊の地図帳の中で、『シベリア地図帳』はレーメゾフがモスクワ滞在中にシベリア庁から依頼を受けて編纂したものであり、ロシアの中央政府による命令で作製され提出された地図帳である。その他の二冊の地図帳は、レーメゾフ家に私的に保管されたものであった。

『シベリア地図帳』は、完成後すぐにトボリスクからモスクワのシベリア庁に送付されて保管された。この地図帳はシベリア庁の業務に使われたものであった。当該期におけるシベリア庁長官であったヴィニウスの書き込みも存在する。『シベリア地図帳』の編纂命令をレーメゾフがモスクワのシベリア庁で受けたのは 1698 年 11 月である。1699 年 1 月に各地図の複写をトボリスクに持ち帰った。その後 1 月 30 日からトボリスクにおいて地図を編集し 1701 年 1 月 1 日に完成した。『シベリア地図帳』所収の 23 枚の地図は 1699 年～1701 年の間にレーメゾフ親子によって編集された地図である。

『地勢図帳』は、トボリスクにおいてレーメゾフ家が保管していた地図帳である。地図帳の掲載図は 168 枚であり、シベリア各地の重要河川流域の「地勢図」が中心である。これらの地図は、各シベリア地域図を編集する際の基礎情報であることが推測できる。レーメゾフ親子は、この情報を『シベリア地図帳』所収のトボリスク地方図やシベリアの各地域図の編集の際にも利用したものと思われ、『地勢図帳』の地図は『シベリア地図帳』編集の際の元データのひとつであったともいえる。その他、ゴドゥノフ図の写し（『地勢図帳』4）1 枚、シベリア全図の写し（162 裏）1 枚、中国図 1 枚、トボリスク都市図やシベリア地域図などが 15 枚掲載されている。『地勢図帳』の説明書きによれば、この地図帳の編集について、「現在図」は 1697 年 3 月から開始し、各河川の流域を中心とした地勢図は 1697 年 9 月 1 日から作製を開始したことが明記されている。しかし、『地勢図帳』に掲載されている地図の多くは『シベリア地図帳』の完成後にまとめられたものであり、地図の複写年代は 1703 年～1711 年と推定されている。

『公務の地図帳』も『地勢図帳』と同様に、レーメゾフとその息子達によって編集され、トボリスクのレーメゾフ家に保管されていた地図帳である。地図帳に掲載されている図は、『シベリア地図帳』『地勢図帳』にも掲載されているトボリスクおよびシベリア諸地域の地図、『地勢図帳』にもある最初のシベリア全図とされる「ゴドゥノフ図」の複写図、『シベリア地図帳』や『地勢図帳』には掲載されてないシベリア諸地域の地図（カムチャツカ図、クングール図など）、その他のヨーロッパ製のシベリア図の複写図、中国図、トボリスクおよび周辺の村々の地図、トボリス

ク軍政官やシベリア総督などの名前入りの樹木図、カメンスキー工場の見取り図や機械図などである。『公務の地図帳』には、『シベリア地図帳』21 や 23 に類似するシベリア図はない。『地勢図帳』のようなシベリアの各河川の地勢図類もない。一方、『公務の地図帳』には、『シベリア地図帳』や『地勢図帳』とは異なり、レーメゾフの業務に関わる年表や業務内容の記述が膨大に存在する。つまり、『公務の地図帳』はシベリア地域を描いた地図帳という側面だけではなく、レーメゾフの携わった業務や生涯について明らかにするための一次史料としても大きな価値があるといえる。ここに収められている地図類の複写年代は、『シベリア地図帳』の完成後であり、1702 年以降と推定されている。また『公務の地図帳』における最後の記述は、先行研究によれば、息子のレオンティによるシベリア総督の記述であり、1730 年と推定されていた。しかし複製本によれば、1730 年以降の記述も存在し、地図帳の完成年代の確定はできていない。『公務の地図帳』を分析することは、先行研究ではあまり注目されていなかった『シベリア地図帳』完成後の 18 世紀前半におけるレーメゾフの業務と地図作製の関係を明らかにすることになる。

以上、レーメゾフ作製の三冊の地図帳について、第一に作製目的や史料の性格が異なること、第二に三冊の地図帳の作製年代が異なること、第三に三冊における掲載地図の内容が異なることの三点を明らかにした。このなかでも、『公務の地図帳』はもっとも後年に編集されたと推定される地図帳であり、他の二冊には存在しない地域情報が盛り込まれている。これは、レーメゾフとその息子達が作製した地図帳に表現された彼らのシベリア地域像の変化を明らかにするうえで、最も適した史料であると思われた。

今後の展望としては、三冊の地図帳に掲載されている個々の地図に関する詳細な分析を行うこと、さらに後世における地図作製において、レーメゾフの地図帳や地図がそれらに及ぼした影響についても検討する必要があろう。

（２）ベーリングのカムチャツカ探検とシベリア図に関する研究

現在、ベーリングの第１次カムチャツカ探検の成果と関わるとされる手書きのシベリア図は、ロシアの所蔵機関およびヨーロッパの所蔵機関に複数のバリアントが確認できる。そこで本研究では、実際にロシア国立歴史博物館地図部（ОК ГИМ）が所蔵しているシベリア図コレクションのなかから、ベーリング探検隊のチリコフ（А.И.Чириков）の側近だったチャップリン（П.А.Чаплин）が作製したとされる手書きのシベリア図に注目する。その複製図 3 枚（目録番号 ГО1882/3, ГО1882/4, ГО7712）のなかでも、オリジナルに最も近いとされる ГО1882/3 を中心に、そこに描かれているシベリア像の特徴を検討し、そのうえで、バリアント間の比較をし、最近のロシア地図史における「民族地図」研究のなかでの本図の位置づけについて紹介しながら、先行研究を踏まえたうえで本図の位置づけを整理した。

エフィーモフの編集したアトラスでは、ロシアで作製された主要な地図が年代順に並んでいることが特徴である。ロシア地図史全般についての解説論文はついているものの簡単な紹介のみである。ГО1882/3 については、チャップリン自筆の地図であるとしている。その後、国立歴史博物館地図部に勤務していたナブロートによって、博物館所蔵図に関する論文が発表され、これが現在もっともこの地図について詳細なものである。ナブロート論文では、ロシア国立歴史博物館所蔵のこれらのシベリア図は、作製者不明ではあるものの、チャップリンの地図のバリアントと位置づけ、その作製者および管理者を「測地学の教師」として有名なクラシリニコフと推定する。

これらのシベリア図は、ロシア国立歴史博物館の「シベリア図コレクション」の 18 番目として整理されており、目録によれば、ГО1882/3, ГО1882/4 は 1753 年作製、ГО7712 は 1757 年作製とある。いずれも作製者に関する記載はない。しかし、明らかに第１次カムチャツカ探検によるチャップリンの地図の複製のひとつであるとナブロートは述べている。その理由として、バリアントのひとつであるゲッティンゲン大学所蔵図にチャップリン作製であることが明記されていること、ロシア科学アカデミー図書館所蔵図にも「測地技師イワン・ハニコフの描いた原本で、海軍少尉ピョートル・チャップリンが描いた」ことを挙げている。チャップリンの地図の複製は、現在 16 点（すべて手書き、ロシア 5、スウェーデン 5、パリ 3、コペンハーゲン１、ロンドン１、ドイツ 1）が存在する。そのうちの 4 つにシベリア諸民族の絵があるとされる。ロシアの所蔵機関は、モスクワのロシア国立歴史博物館のほかに、モスクワのロシア国立古代文書館（РГАДА）、サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー図書館文書部（ОР БАН）であるという。なかでも、ドイツのゲッティンゲン大学所蔵図は、ロシア歴史博物館所蔵図のバリアントであると位置付けられている。なお、これらのシベリア図は、筆者の調査によれば、他の２つの地図と一緒に歴史博物館で保存されていた。ひとつは、クラシリニコフ作製の地図（1777 年）、もうひとつはクック探検隊が作製した地図（1779 年）である。いずれも

手書きの一枚ものであり、ロシア地図史上、重要な地図とされている。ナブロートによれば、ベーリングのカムチャツカ探検の成果を反映した地図は、歴史博物館所蔵のほかのシベリア図にも影響を与えており、そのひとつの地図にあるカルトーシュのなかに「オリジナルの地図と目録でワシリー・クラシリニコフが作製し描いた」とあるという。クラシリニコフは、第1次・第2次カムチャツカ探検の地図や資料を集めていたため、それをもとにこのシベリア図を編集することができた。それゆえ、この地図の作製者および管理者を、クラシリニコフであると推定している。しかし現段階では、直接の証拠がないうえに、ナブロートが述べているコンテクストのみでは、クラシリニコフがこれらの地図の作製者であるとは断定できないと考えており、さらなる検討の余地が残されているといえる。

その結果、ロシア国立図書館所蔵のシベリア図は、チャップリン（ベーリング探検隊に同行したチリコフの助手）の自筆である可能性は低いものの、測地学者のクラシリニコフの複写・作製であるという先行研究の主張も確かであるとはいえない。しかし、地図自体はあくまで後年の複製であり、地図史料のひとつとして活用したもののひとつであると推測できた。ベーリングの報告書に付されて提出されたシベリア図のオリジナルそのものは失われてしまったようであるが、手書きによる模写を繰り返し、数々のバリアントを産み出すことによって、18 世紀後半までシベリアおよび極東の地域情報のひとつとして生き続けたといえる。

そして、測地技師たちの作製したいくつかの地図を基礎資料として、新しい編集図を作製していくことは、当時の知識人層のロシアの地図作製のひとつの在り方であったと思われる。また、18 世紀前半のペテルブルクの知識人社会のなかでは、これらのシベリア・極東の地域像を、地図の複写を行うことにより共有していたともいえる。本研究で扱った手書きによる複製図の存在は、当該期における知識人層による未知なる地域に関する情報の所有というコンテクストからも考えていく必要があろう。

今後の課題としては、同所蔵機関にある第2 次カムチャツカ探検の成果とされる手書きのシベリア図について、その描かれている地域の特徴や用いられた情報などを検討し、地図史上の位置づけについて再考することを予定している。

（3）シベリア・極東の出版都市図に関する研究

本研究では、モスクワ・サンクトペテルブルク・イルクーツク・ハバロフスク・ウラジオストク・ブラゴベシチェンスクの図書館・文書館での地図史料調査をもとに、シベリア・極東のロシア植民都市の建設状況と各都市を対象とした都市図を概観し、ロシアにおけるシベリア・極東における近代都市図（出版地図）の特徴について考察した。

帝政期においては、都市図の刊行主体が市参事会のケースである場合が見られた。つまり、植民都市の支配を行う組織が都市図も刊行していたといえる。ウラジオストクの都市図に見られるように、市参事会は、各植民都市内部の土地の区画設定や各土地の価格等も設定していたと思われ、それらの基礎資料として都市図が刊行され、都市住民に公開されていたと考えられる。いずれにしても植民都市計画の進展のための基礎資料として、行政機関によって作成された都市図であった。

また、シベリア・極東の各都市の書籍商が地図の刊行を行っていたことも確認できた。これらは、各都市内およびその周辺に居住する住民に向けて、あるいは他の地域に居住する人々にも各都市の詳細な地域情報を提供する役目を果たしたであろう。しかし、帝政期の市参事会や地図出版者が実際に都市図の測量を行っていたとは考えられない。それらの都市図が刊行される前段階において参謀本部による土地の測量が行われていたからである。

シベリアにおける参謀本部の測量地図作製は、1830 年代から開始された。たとえば、1885 年に発行されている地図目録では、西シベリアと東シベリアの地域図が網羅されている。一方、極東は 1890 年～1900 年頃に測量が行われた。19 世紀後半から 20 世紀初期にかけては、この測量された都市図をもとに、それらを再編集・再利用して、各都市においてローカルな地図作製およびその出版が行われていたと推定した。

1920 年代になると、ローカルに作製・出版された都市図には、都市の中心部のみを地図の中央に掲載し、その周囲に広告をめぐらし発行年次の明記されていないものもあるが、描かれている内容などからすべて 1920 年代の出版地図であると想定できる。このタイプの地図の刊行主体は当該地域の公営企業であると思われる。内戦が終了し、ソ連時代になったことで、新たに都市に存在する工場や交通機関、食料品店、衣料品店などを住民に宣伝するために描かれていると思われる。しかし、オムスクの都市図の事例で、参謀本部が出版した都市図の形式・内容と比較してみると、参謀本部が作製・出版した都市図（オムスク No.1・No.2）では、市街地の北東部分に軍関連施設が存在したことが読み取れるが、同じ地図を用いながらも 1925 年の都市図（オムスク No.3）では広告によって隠されている。極東の 3 都市においても同様に、帝政期の地図に示されている軍管轄地域は、地

図の範囲の外である。もちろん広告によって隠されている市街地の周辺部分には、1920 年代においても工場や官舎など軍関連施設の立地が予想できる。しかし、その地域は帝政期の地図のように印刷地図の範囲には入っていない。

1930 年代になると、イルクーツク No.22・No.23・No24 の事例では、イルクーツクのソビエトによる測量図が作製され、編集されていたことが判明した。またノボシビルスク No.1 では 1920 年代に測量技師による測量図および水準測量が実施されていたことも判明した。このように、帝政期に作製された測量図の編集・利用ではなく、新たな都市図の作製および出版が行われたことは、1920 年～1930 年代のソビエト時代のシベリア・極東の各都市における新しい時代の要請によるものであったと思われる。

今後の課題としては、ロシアにおける出版された都市図の地図史研究を深化させていくことが挙げられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 米家志乃布：ベーリングの第一次カムチャツカ探検とシベリア図 - ロシア国立歴史博物館所蔵のシベリア図を中心として - 、法政大学文学部紀要、第 64 号、査読無、2012 年、51－66 頁.

② 米家志乃布：20 世紀前半のシベリア・極東における植民都市と地図作製、法政大学文学部紀要、第 62 号、査読無、2011 年、57－71 頁.

〔学会発表〕（計１件）

① 米家志乃布（2010）：20 世紀前半のシベリア・極東における植民都市と地図作製、日本地理学会秋季学術大会、2010 年 10 月 3 日、名古屋大学.

６．研究組織
(1)研究代表者

米家　志乃布（KOMEIE　SHINOBU）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：３０２７２７３５